

氏 名 葉山 茂

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大 1267 号

学位授与の日付 平成 21 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 産業としての漁業における自然と人の生業誌

論文審査委員 主 査 准教授 西谷 大
教授 青山 宏夫
准教授 野林 厚志
教授 丹野 正（弘前大学）
理事 篠原 徹（人間文化研究機構）
教授 安室 知（神奈川大学）
教授 常光 徹

論文内容の要旨

本論文の目的は産業としての漁業をおもな生業とする人びとの暮らしに注目して、現代の自然と人の関係を通時と共時の両側面から検討し、自然と人の生業誌という方法を提示することである。本論文で論じる生業誌とは人びとを主語として、人びとがどのように暮らしてきたのかを生業活動を切り口として検討する方法のことである。

自然と人の生業誌を論じるために、まず第1章では漁業に関して自然と人の関係を論じた先行研究を整理した。自然と人の関係を論じる先行研究はその視点から自然と地域社会、自然と集団、自然と個人という三つにわけられることを指摘した。自然と地域社会の関係を論じる視点では、漁業を生業とする地域社会の制度や集落構造の特徴がさかんに論じられてきたが自然と人の関係という点からは検討がほとんどされていなかったことを指摘した。また自然と集団の関係を論じる視点では特定の自然資源の利用形態が論じられ、人びとが生業をいかに営んできたかという視点から自然資源の利用が論じられることが少なかったことを指摘した。三つ目の自然と個人の関係を論じた視点では伝統的な技術や技能の特徴が論じられ、また伝統と現代の技術や技能の連続性が論じられたものの、現代の自然と個人のかかわりが論じられていない点を指摘した。

第2章では以上の先行研究の問題点を解決するためには総合的な視点から自然と人の関係を検討する必要があることを指摘した。そして生業誌という方法について論じた。生業誌が目指すのは生業活動を切り口とした民俗誌であることを述べた。そして自然と人の生業誌を論じる上での三つの視点を整理した。三つの視点とは先行研究で論じた自然と地域社会、自然と集団、自然と個人である。この三つの視点は自然と人の関係を論じようとしている点では目的を一つにしていることを指摘し、同時にこれらはそれぞれ縮尺の異なる問いであると論じた。そして三つの視点をそれぞれ詳細に論じた上で、最終的に総合した議論が必要であることを論じた。そしてこれらの視点を論じる上で、通時と共時の両側面からの検討が必要なことを指摘した。

第3章から第5章では第2章で論じた三つの視点を具体的な事例をつかって検討した。

第3章では自然と地域社会の関係を論じた。自然と深く関わって生きる人びとの活動が地域社会の構成にあたえる影響を検討した。事例として、似た地理的条件にある青森県内の二つの村をとりあげて、両地域の自然と地域社会の関係を比較した。第3章の前半では二つの村の生業戦略の違いについて検討した。一方の村は一貫して漁場を拡大する生業戦略をとり、もう一方の村は一貫して地先の限られた漁場での漁撈活動を優先する生業戦略をとってきた。両村の生業は1949年の漁業法の改正以降の漁場開放と漁船や漁具の発達など、漁業が近代化するなかで、新しい自然資源を見つけて生業活動のなかに組み込んできた。しかし資源利用が変化しても、両地域の人びとがとった生業戦略は変わらなかったことを指摘した。同時に人びとの行動は生業活動を通じて自ら規定したイーミックな自然に規制されている点を指摘した。

第4章では自然と集団の関係を論じた。第4章では釣り漁に注目し、漁をする人びとにとって重要な自然資源を中心に議論をした。自然資源をつかって生きる当事者たちの活動が近代化によってどのように変容したのかを、長崎県小値賀島の漁撈活動を事例として検討した。自然資源をつかう人びとの活動をライフヒストリーにもとづいて検討すると、1950年以降、商品としての自然資源は増えていた。さらに個々人がつかってきた自然資源を通時的にみると、資源の発見—利用—利用放棄というプロセスがあることがわかった。人びとは資源を発見し、利用し、商品価値がないと判断すれば人びとはその

自然資源をつかわなくなってしまう。小値賀島の漁業では個人漁が広まったあと、商品としての資源の発見—利用—利用放棄というプロセスをさまざまな自然資源に対して繰り返してきた。一方、通時的な視点から一つの資源の利用を検討すると、自然資源の利用をめぐる社会的な規制はそのときどきの経済的・政治的变化や、同じ地域内で別の自然資源をつかう人びととの関係の変化に応じて、めまぐるしく変わっていたことを指摘した。

第5章では自然と個人の関わりを論じた。産業化した漁業のなかでもとりわけ先進的な科学技術を投入しておこなわれる海の魚類養殖業をとりあげて、自然に対峙する個人がどのような知識を駆使し、どの範囲の自然に対して働き掛けているのか検討した。事例として愛媛県宇和島市津島町北灘地区の魚類養殖をとりあげた。そして科学技術や科学的知識が次々に導入される魚類養殖業の現場においても、自然と人の関係は単純に乖離しているとは言えないことを論じた。魚類養殖業では分業化が進み、一見すると養殖業者の仕事は単なるルーティンワークにみえる。しかし実際の彼らの行動をみると、自然観察が仕事の効率化に重要であることがわかった。人びとの自然についての知識は魚類養殖業がはじまった当初にくらべれば、深まっていた。

しかし近代化によって自然と人の関係は、伝統的な自然と人の関係と比べれば変容している。自然と人の関係は乖離しないとはいえ、個人が運用する自然に対する知識は局所化している。伝統的な自然と人の関係で論じられる広範な知識と比べると、自然に対する知識が及ぶ範囲は狭い。第5章の最後では釣り漁における自然と人の関係を検討した論文との比較をして、自然に対する知識の狭まりは決して魚類養殖業だけで起きた特殊な状況ではなく、海をつかって生計をたてる人びとの活動すべてに及ぶ可能性が高いことを指摘した。

第6章では第3章から第5章の事例にもとづいて、自然と地域社会、自然と集団、自然と個人それぞれの関係からみる自然と人の生業誌についてまとめた。これまで三つの視点はそれぞれ独立したテーマとして存在してきたが、これらの視点は自然と人の関係を論じていながら、統合的に論じられていなかった。そこで本論文の最後では自然と人の関係という観点から三つの議論をまとめ、生業誌という方法の有効性について論じた。

三つの議論をもとに現代の産業としての漁業における自然と人の関係をみると、人びとは現代の社会の変化に柔軟に対応しながら生きてきたことがわかる。そうした対応は、人びとが生業活動を通じて規定していたイーミックな自然を固定的なものにするのではなく、つねに生業活動を通じて更新していくことができることを示していた。つまり共時と通時の両側面から多様な視点を総合的に検討することによって、人びとの営みをより具体的に生き生きとしたものとしてとらえることができることを指摘した。

以上のことから生業活動を切り口として人びとの営みを固定化した見地からではなく、動的で生き生きとしたものとして理解する方法として、生業誌が有効であることを論じた。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、戦後の日本の漁業が、産業化していくなかで、その構造的な変化に注目しながら、生業活動を分析の1つの切り口にして、人と自然との関係のダイナミクスを論じているものである。

この論文の優れている点は、青森県小泊村、長崎県小値賀島と佐井村磯谷集落の漁業生活、愛媛県宇和島市津島町のブリ養殖を対象にして、計250日を超える長期のフィールドワークを行い、それぞれの自然利用のあり方と生業戦略を、通時的・共時的な視点の両面から描きだしていることにある。同時にフィールドワークのなかから課題を明確化し、よりの確な課題検証を行うことに成功している。現地調査から得られる精緻なデータにもとづく論証が当論文の根幹を成しており、このことが調査データの信頼性を高め、筆者の議論を実証的で奥行き深いものになっている。

次にこの論文を特徴づけているのは、問題設定と調査地の選択を含む研究方法にある。問題設定に当たって、自然と人との関係に関する生態人類学・民俗学を中心とした先行研究について、筆者の独自の視点から、①自然と地域社会、②自然と集団、③自然と個人という3つにわけて、それぞれについて問題点と課題の整理をおこなっている。①では、地域の社会構造が生業に規定されているとする議論がこれまで多かったこと、②では自然資源をどのように使って生きてきたのかという生業の視点が弱いこと、③ではこれまでの先行研究が共時的な視点からの検討に偏っていると、それぞれに指摘している。その上で、「生業誌」を新たな方法として提示している。確かに「生業誌」という字義には、方法という意味は含まれない。むしろ当論文でいう「生業誌」は、分析的な記述をもとに、生業活動を切り口にして人びとがどのように暮らしてきたのかを明らかにしたいという、研究の方向性や態度という意味合いが強い。筆者が論文で主張する「生業誌」を方法論として一般化していくためには、今後、言葉の選択を含めた検討が必要であろう。

調査地は、日本の戦後における漁業の変化を明確に捉えることのできる地点を選択し、調査と分析をおこなっている。つまり第3章では自然と地域と社会との関係について、地形的に近似する2ヶ所の漁業集落を取り上げ、自然（海）をめぐる生業戦略の違いが地域社会の構成にあたえた影響を検討している。一方の村は一貫して漁場を拡大する生業戦略をとり、もう一方は一貫して地先の限られた漁場での漁撈活動を優先する生業戦略をとってきたが、両村はたとえば出稼ぎや移住といった地域社会の構成にも深く関わっていることを明らかにした。第4章では自然と集団との関係について、釣り漁に注目し自然資源に依存して生きている人びとの活動が近代化によってどのように変容したのかについて検討している。その結果、1950年代以降、商品としての資源はむしろ増えていること、また海の自然をめぐる資源の発見—利用—利用放棄というプロセスがあること、さらには近代以降そうしたサイクルがめまぐるしく変化するようになったことを明らかにしている。続く第5章では、自然と個人との関わりについて、産業化した漁業のなかでもとりわけ先進的な科学技術を投入しておこなわれる魚類養殖業を取り上げ、自然に対峙する個人がどのような知識を駆使し、どの範囲の自然に対して働きかけているのかを明らかにした。

4つのフィールドにもとづく研究は、単なるモノグラフに終わっているのではなく、産業としての漁業が成立していく過程で、漁業が資源の効率的な利用を最重視するようになる一方で、人間と自然との関わりは、新たな関係性を創出していることを指摘している。

ただ各事例を分析する上で、自然と地域社会、自然と集団、自然と個人という3つの視点を提示しながら、それぞれのフィールドでは、個々の要素について検討をおこなっている。当論文ではそれぞれの視点の可能性を探ることを第一に重点をおいたため、このよう

な方法をとったと理解できるが、今後は調査地において、視点の幅を広げていく必要があるだろう。また、第3章、4章と第5章とでは扱った問題の性質が必ずしも同じではない点、漁業従事者の知識の変化に対する多面的な解釈の必要性が公開審査会で指摘された。

しかし論文全体としては、4ヶ所の調査地の多様性をすくい上げながら、自然と人間との関係という一貫した視点をもって検討することに成功している。そして結論としてこれまでの先行研究が集団、地域社会の関係、自然と個人を別々に捉えていたことを批判し、人と自然との関係性を問うとき、自然と個人、集団、地域社会の関係は総合的に考える必要があるという新たな研究視点を提示した点は慧眼であり、今後の漁村研究に与える学術的意義や貢献は高く評価できる。

当論文は、戦後の日本の漁業が産業化される流れのなかで、人と自然との関係に焦点をあて、その変容や変質についてフィールドワークを通じて実証的に研究した点が高く評価され、博士学位論文として値するものと判断される。